

論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	泉 大輔
学位論文名	Poor Inter-observer Agreement on the Endoscopic Diagnosis of Eosinophilic Esophagitis among Japanese Endoscopists	
学位論文審査委員	主査 副査 副査	川内 秀之 森田 栄伸 駒澤 慶憲



学位論文の要旨

本邦で近年増加傾向にある好酸球性食道炎は、内視鏡下生検で病理学的に食道好酸球浸潤を証明することが必須であるため、内視鏡医は特徴的な内視鏡所見を把握しておく必要がある。申請者らは、本邦の内視鏡医を対象として好酸球性食道炎の診断の正確性を明らかにするため、内視鏡診断および各所見の検者間の一致率を評価した。

当院および関連施設に勤務する内視鏡医 40 名（平均年齢 42.5 歳、内視鏡学会指導医 20 名、診断経験者 12 名）を対象とした。参加者は、まず内視鏡所見について 15 分程度の講義を受講した後、50 枚の内視鏡画像を提示され、診断および主要内視鏡所見（縦走溝、リング状変化、浮腫、白色滲出物）の有無について判定を行った。その際の検者間一致率（ κ 値）を算出した。更に、参加者は、1 か月後にランダム化した内視鏡画像について同様の判定を行ない、検者内一致率を算出した。加えて、内視鏡学会指導医資格の有無により、群間比較を行った。 κ 値は既報を基に 0.4 未満を一致率不良と定義した。

好酸球性食道炎の診断に関する検者間一致率は 0.34 と許容できる水準に達していなかった。各所見については、縦走溝が 0.48 と最も高く、続いてリング状変化 0.34、浮腫 0.26、白色滲出物 0.21 の順であった。内視鏡学会指導医資格のある群では、資格のない群に比して診断および縦走溝、浮腫、白色滲出物の判定で有意に高い一致率であった。一方、検者内一致率は概ね 0.4 を超えており、許容できる水準であった。

本研究は、本邦の内視鏡医を対象として好酸球性食道炎における内視鏡診断の正確性を検討した初めての報告であり、内視鏡診断の検者間一致率は臨床的に許容できる水準に達していないことが明らかとなった。各所見については縦走溝のみが許容できる水準であり、最も重視すべき内視鏡所見であることが示された。これらの結果は、本邦の内視鏡医に対する教育の必要性を示したものであり、臨床的に有益な研究成果である。

最終試験または学力の確認の結果の要旨

申請者は、内視鏡医を対象として好酸球性食道炎の診断の正確性について検討を行い、内視鏡診断と各所見の検者間の一致率を評価し、検者間の一致率が臨床的に許容できる水準に達していないことを明らかにした。本研究は実地臨床において有益な研究であり、申請者の本領域の知識も十分で、本学の学位に値すると判断した。
(主査 川内秀之)

申請者は、好酸球性食道炎の内視鏡による診断の正確性について、臨床写真を材料として 40 人の内視鏡医を対象に診断の一致率を検討した。その結果、一致率が臨床的に許容できる水準に達していないことから、好酸球性食道炎の内視鏡診断における問題点を提議した。申請者の本領域の知識も十分で、本学の学位に値すると判断した。
(副査 森田栄伸)

申請者は、本邦で増加傾向にある好酸球性食道炎の内視鏡医による内視鏡所見での診断一致率が不十分である事を明らかにした。本研究により、現状では好酸球性食道炎の内視鏡診断は臨床的にも課題があり、今後内視鏡医への啓発も含めて診断精度を上げる必要性が示唆された。申請者の本疾患に対する知識も深く、本学の学位に値すると判断する。
(副査 駒澤慶憲)